

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成23年 11月 5日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 高 田 洋 平

助 成 の 種 類	平成23年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成	
研 究 集 会 名	「ネパール社会と政治の変化する動態」 International Conference on “Changing Dynamics of Nepali Society and Politics”	
発 表 題 目	「生活空間としてのストリート—ネパール、カトマンズ盆地におけるストリートチルドレンの日常実践—」 “Urban Street as Living Space: The Lives of Street Children in Kathmandu, Nepal”	
開 催 場 所	ネパール連邦民主共和国	
渡 航 期 間	平成23年 8月17日 ～ 平成23年 8月19日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	20,000円
	使用した助成金額	20,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	渡航費(航空券代、空港使用料、査証代)21.8000円
上記、渡航費(21.8000円)の1部(20.0000円)に充当		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 振り込みなどの手続きにおいて事務局の皆さまの対応が素早く丁寧だったため、渡航前の慌ただしい時期にあっても助かりました。また使途についての報告や手続きが柔軟で非常に利用しやすい助成だったと思います。 今回の発表によってさまざまな収穫がありましたが、それらは御財団の助成によってもたらされたものです。本当にどうもありがとうございました。	

成 果 の 概 要

高田 洋平

アジア・アフリカ地域研究研究科

東南アジア地域研究専攻

博士課程 3年

1. 会議概要

現代ネパールは、1990年民主化によってそれまでのパンチャーヤット体制（国王を頂点とした専制政治）が終焉したが、市場経済の自由化政策の導入による経済的状況の変化や、1996年のネパール毛沢東主義派による人民戦争開始などの政治的混乱など、政治経済、社会的に流動化した状況が続いている。

今回、申請者が参加した国際会議「ネパール社会と政治の変化する動態(International Conference on “Changing Dynamics of Nepali Society and Politics”）」（平成23年8月17日～19日）は、そのような流動的な状況にあるネパールの政治や社会の変動について総合的な理解を推進することを目的として開催された会議であった。ネパール・ヒマラヤ研究学会、(Association for Nepal and Himalayan Studies)、ソーシャル・サイエンス・バハ(Social Science Baha)、社会的対話のための連合(Alliance for Social Dialogue)という3つの研究機構が主催した本会議には、ネパール国内や南アジア地域出身の研究者に加えて、ネパール政治研究や社会研究に従事する欧米の研究者も数多く参加した。3日間の会議のなかで合計16のセッションが組織され、報告者はおよそ50名、一般参加者は300人になりネパール国内で近年開かれた地域研究、人文科学系の国際学会としては比較的規模の大きいものであった。

報告のテーマは「政治」「社会システム」、「経済と社会変化」、「民族アイデンティティ」「移民」や「グローバルな移動」、「宗教」、「都市化」など多岐にわたった。また発表者の専門領域も政治学や社会学、文化人類学や地域研究など学際性に富むものとなった。

2. 報告内容

申請者は「都市における社会経済的な生活の変化」というセッションで、現代ネパールの都市社会の生活とそこで生きる人々についての人類学的な研究発表を行った。とくに自らの研究対象であるストリートチルドレンの日常実践を取り上げ、これまでの文化人類学的研究で明らかになった調査結果をもとに「生活空間としてのストリート—ネパール、カトマンズ盆地におけるストリートチルドレンの日常実践—」“Urban Street as Living Space: The Lives of Street Children in Kathmandu, Nepal” というテーマで報告を行った。

ネパールにおいてストリートチルドレンは1990年代以降、「子どもの権利条約」や「児童労働」といったグローバルに流通する強力な言説と結びつきながら社会的に可視化されてきた。その過程でストリートチルドレンは境界づけられた「適切な介入や社会化を必要とする存在」として理解されるようになる。こうした理解とそれに基づく開発や支援団体の運動は、子どもたちの生活上の問題に焦点化して彼らの生活の改善を目指すという点で重要なものであったが、子どもがストリートで生きようとする積極的な動機や、リスク、困難に対するストリートチルドレン自身が備えている対処能力を過小評価してしまう傾向にあった。そうし

た理解は、ストリートチルドレンが生み出す多様で複雑なネットワークや、賃金労働、収入や消費行動など、都市のストリートという場所での彼らの日常実践をうまく理解することができない。

そこで本報告では「彼らがストリートという場所でいかに生活しているのか」を問いとしてストリートチルドレン問題がネパール社会のなかでどのように構築されてきたのかについて述べた。そしてストリートチルドレンの日常実践に関するデータから、仕事、消費、余暇、そして暴力に関する具体的な事例を中心に紹介した。結びとして、ストリートチルドレンは開発・支援組織の活動のなかで一般化していった「適切な介入や社会化を必要とする存在」というよりも、状況を改変しながら積極的に行動する力能をもった存在であり、彼らの生活はこれまでの理解では十分に明らかにされてこなかった広がりをもつということを示した。しかし同時にそれは彼らへの支援や介入が不必要であるということの意味しているのではなくむしろそうした広がりをもったものとして彼らの生活を理解することでよりよい支援や介入のあり方を考察していく必要があるということについて指摘した。

3. 報告の成果

今回の報告では非常にたくさんの参加者から意見を頂く貴重な機会となった。とくにネパール研究に第一線で携わる研究者との質疑は非常に刺激的であり、有益なコメントを多数頂くことができた。また研究者だけでなく会議に出席していた国連職員やNGOスタッフなど実務家からも意見をもらうことができ、研究の枠組みや視点に関するものから子どもの生活の具体的な部分や背景まで幅広い内容の質疑となった。それらは示唆に富むものであり、その後の研究を進めるうえで大きなモチベーションとなっている。また会議終了後の懇親会は、同じセッションで意見のやりとりをすることになった研究者や実務家の方と歓談する機会となった。そのようなネットワークが広がったことも今回の国際会議での大きな成果の1つとして挙げるができる。さらに会議出席に際して大会事務局に提出した今回の発表に関わる草稿は、国際雑誌にて第一回目の査読コメントを受け加筆修正している段階であり、今後、国際雑誌に投稿論文として掲載される予定である。

今後の研究活動につながるこれらの成果は、ひとえに御財団の国際研究集会助成が提供して下さったことによるものである。今回のような貴重な機会を頂いたことに心からの御礼を申し上げたい。